

Clinical Subtypes in Children with Attention-Deficit Hyperactivity Disorder According to Their Child Behavior Checklist Profile

香月, 大輔

<https://hdl.handle.net/2324/4474999>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(別紙様式2)

氏名	香月 大輔			
論文名	Clinical Subtypes in Children with Attention-Deficit Hyperactivity Disorder According to Their Child Behavior Checklist Profile			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	須藤 信行
	副査	九州大学	教授	中川 尚志
	副査	九州大学	教授	大賀 正一

論文審査の結果の要旨

本研究では、親が子どもの行動チェックリスト（CBCL）で評価した情緒と行動の問題のパターンによって同定される注意欠如・多動症（ADHD）のサブグループを特定することを目的とした。方法は、児童精神科外来を受診した子どものうち、DSM-5の診断基準に基づいてADHDと診断された314人の児童（4歳から15歳）を対象とした。クラスター分析を実施し、併存する精神疾患、全般的な社会生活機能、薬物療法についてクラスター間で比較を行った。結果としてCBCLの症状群尺度を用いてクラスター分析を実施し、4つの異なるサブグループを得た。「高内在化・外在化」群は、CBCLにおいて内在化問題と外在化問題の重複を示した。また、「高内在化・外在化」群は、自閉スペクトラム症を併存する割合が高く、自閉スペクトラム症の特徴もより強く有していた。「不注意・内在化」群は、DSM-5で特定される、「不注意優勢に存在」しているADHDが多く見られた。「攻撃性・外在化」群は、反抗挑発症と素行症を併存している割合が高かった。「低精神症状」群は、すべての症状群尺度で低得点であった。ADHDの児童は、内在化問題と外在化問題の有無によって特徴づけられる4つの異なるサブグループに分類された。内在化問題と外在化問題の重複には、情動制御障害とそれに関連する神経生物学的基盤が仲介している可能性が考えられる。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。